

広瀬憲三編著

『関西復権の道—アジアとの共生を梃子として』

(関西学院大学産研叢書 43)

中央経済社 2020

松 林 洋 一

目次

はじめに……………	(101)
本書の構成と内容……………	(101)
本書の貢献……………	(102)
おわりに……………	(103)

はじめに

本書は、関西経済の特徴を様々なアングルから俯瞰、展望するとともに、データに基づく定量的分析も織り込みながら、関西の経済構造の深部に迫る力作である。関西経済の長期的な停滞が言われる中、冷静かつ客観的な本書は、実に魅力的であり是非一読をお勧めしたい作品である。以下では本書の構成と内容を要約した上で、その貢献を紹介することにしたい。

本書の構成と内容

本書は、はしがきに続く7つの独立した章から構成されている。いずれの章も関西経済の構造的特徴をみごとに浮き彫りにしている。以下では各章の内容を要約し、その概要を紹介していく。

第1章「地域産業連関表から見た関西経済の構造—大阪府経済を中心に」では様々なタイプの地域産業連関表を用いて、関西の経済構造の特徴を定量的に把握する。一般に産業連関表からは、当該国あるいは当該地域における経済波及効果を試算できるとともに、産業連関表から間接的に計算される諸係数に基づいて、経済構造の数量的な把握が可能となる。従って関西地域を対象とする地域産業連関表を用いることによって、関西経済

の様々な特徴を考察することができる。その際本章では、1) 域内収支(輸移入—輸移入)を求め、関西経済の「強み」を他地域の域内収支と比較する、2) 大阪府と愛知県の製造業の生産波及効果の比較を通じて、関西経済の経済的影響度を確認する。大阪府では卸売部門が関西経済の中核機能を担っており、域際収支において圧倒的な黒字を示しているが、近年黒字が減少傾向にある。他方東京では情報通信部門や金融保険部門など、労働生産性の高いサービス産業の黒字が顕著である。また中部地域の中核を担う愛知県では、自動車部門の域際収支が突出しており、他地域への生産波及効果は大阪府の輸送機械部門と比べ大きい。

第2章「関西経済と「モノ」「サービス」の貿易」では関西地域におけるモノとサービスの対外的取引を、アジアとの関係において詳細に検討している。域内総生産、労働力人口といった国内経済活動の基本となる指標によると、関西地域はそのプレゼンスを低下させている。しかし域内総生産に占める輸出比率は全国平均よりも高く、特にアジア圏への輸出割合は東京や中部地方と比べかなり高い。品目別にみると半導体等電子部品のシェアが10%以上を占めており、その多くは中国向けである。関西の輸出の特徴は「中間財の中国への輸出」と特徴付けることができる。近年関西では海外観光客の来訪が著しく増加している。訪日外国人の日本での財・サービスの消費(いわゆるインバウンド需要)は、国際収支ではサービスの受取(輸出)として計上される。観光目的で関西を訪れる訪日外国人数は、2016年以降関東よりも多く

なっており、宿泊述べ人数も増加傾向を続けている。このように関西地域において、サービス輸出は同地域の経済成長にとって極めて重要な要因となり得ることが示唆される。

第3章「外国人から見た神戸港の魅力度に関するイメージ調査—横浜港との比較」では神戸港と横浜港に対して外国人が観光地として、また居住地としてどの程度魅力を感じているのかという点について、詳細なアンケート調査を行っている。そして調査結果を踏まえて両港の魅力の違いを詳細な統計的分析を通じて明らかにしている。神戸港では複数回の訪問者（高いリピーター）から好感を持たれており、昼夜を問わず魅力を感じているようである。また横浜港に感じる「都会性」とは異なり、神戸港には「落ち着き」「親和性」といった特徴もあるようである。こうした知見は、神戸港独自の満足度向上の施策に向けて貴重な示唆を与えるものである。

第4章「阪神港の背後圏と震災の影響—港湾選択における経路依存性」では、1995年1月の阪神淡路大震災が、当時日本有数のコンテナ取り扱ひ港湾であった神戸港の背後圏（同港湾が取り扱う貨物の発生源や到着地となっている地域）への影響について考察を行っている。具体的には「コンテナ貨物流動調査データ」を用いて、阪神淡路大震災の影響が、神戸港湾の背後圏への取引を有意に変化させたか否かを精緻な計量分析によって明らかにしている。実証結果より、1960年代以降わが国のコンテナターミナルとして中核的な役割を担っていた神戸港は、震災によって大きくその優位性を失っており、今再びの回復は決して容易ではないことが示唆される。

第5章「関西の百貨店らしさ—その特徴と動態」では、「関西の百貨店らしさ」とは何か、その魅力は何かという点について、丁寧な実証分析を行っている。具体的には約30年間の全国の主要百貨店における品目別売上データをもとに、関西の百貨店固有の特徴とその形成期を明らかにする。実証結果より、2011年頃の売り場面積拡張競争の時期を境として、関西の百貨店が食料品および婦人服の売り上げの拡大を「らしさ」として意識するようになったことが明らかとなった。「デ

パ地下が強い関西の百貨店」というイメージはこうした背景のもとで、確立したと考えられる。この特徴は大きな強みである反面、顧客が特定の消費者層に偏っていること、家族全員の買い物ニーズを満たせる場所ではなくなりつつあるという問題も有していることになる。昨今のインバウンド消費の売上額拡大に見られる数量重視の傾向は、こうした問題点を考える上でも重要なポイントである。

第6章「関西の中小企業のベトナム現地化戦略に関する一考察—中農製作所の事例研究」では、日本海外現地経営における「現地化」の実態とそのあり方を、大阪の中小企業の事例に基づいて詳細に検討している。かねてより日本企業は海外子会社の幹部人材について「現地化の遅れ」が指摘されてきた。そこで本章では、株式会社中農製作所（本社：大阪府東大阪市）への詳細なインタビューを通じて、「現地化」のあり方に関する興味深い知見を得ている。「現地化」とは、単に子会社トップを現地人に置き換えれば済むというものではなく、中長期の視点に立脚した多面的な施策が欠かせないことが明らかとなっている。

第7章「『下り坂』日本社会における関西復権の道—住みやすい関西生活圏の構築」では、2000年代後半以降、日本において進行している人口減少という傾向を背景として、関西経済が如何に復権するのかという問題を、都市社会学の観点から重厚な考察を行っている。大都市圏への人口集中がピークを迎えた1965年以降、東京への一極集中と、その対極をなす関西経済の地盤沈下が顕在化し始めた。その結果東京と大阪の居住空間、行政機能には大きな違いが露呈され始めている。大阪（あるいは関西）が取るべき方向性は、東京一極集中の問題点を十分に理解し、独自の軸を構築することにある。その際の軸とは、大阪・京都・神戸の生活圏を基盤とした住みよい関西生活圏の構築に他ならない。

本書の貢献

先に紹介したように、本書は様々なトピックスからなるとても魅力的な関西経済論である。魅力のポイントはどこにあるのだろうか。評者は以下

の3点を挙げることにしたい。

1) 多面的なアプローチによる分析

本書の最大の魅力は、様々な分析アプローチに基づいて重層的な考察がなされているという点である。具体的には、計量分析による考察（1章、4章、5章）、統計分析による考察（3章）、アンケート調査による考察（3章）、ヒアリング調査による考察（6章）、長期的俯瞰による考察（2章、7章）である。経済現象は多面的かつ多彩であり、様々な諸現象を単一の手法、アプローチのみを用いて分析を行った場合、ともすれば狭隘な知見を得ることに陥りかねない。計量分析はデータに基づく客観的な検証が可能であるものの、結果の背後に存在する歴史、社会、風土、慣習といった側面にまで考察を深めることが困難となる。アンケート調査やヒアリング調査は、分析対象の属性や行動指針をストレートに把握できるという利点はあるものの、標本抽出の偏りという固有の問題点があることも否めない。社会科学の諸領域において研究の細分化が進んでいる現在、単一のアプローチが逢着する問題、限界については厳に戒めるべき点である。本書はこうした点を十分に熟慮した上で、多面体としての関西経済を、多面的なアプローチによって、実に生き生きと活写している。本書を一読し、読者の多くは“大阪梅田の夕暮れ時のデパ地下における雑多な賑わい”、“海と山が見事に調和された神戸港特有の美しさと落ち着き”、“東京にはない関西居住空間特有の安らぎ”という、様々な関西の相貌を思い描くはずである。この魅力はまさに多面的なアプローチの所産に他ならない。

2) バランスの取れた現状認識

変化する経済現象を論じる場合、ともすればその評価は一面的、一方的なものとなる可能性がある。関西経済の地盤沈下が言われて久しい。消費、投資、労働、行政など問題点は実に多くその根も深い。しかしこうした多くの課題は、ともすれば悲観的、消極的な論調のみに陥るきらいがある。関西経済は関東や中部圏と比べ、魅力的かつ付加価値の高い産業を創り出せていない、この傾向は少子高齢化という日本全体の趨勢によってさらに拍車がかかるのではないか、という類である。翻っ

て本書を一読した際、こうした悲観論一辺倒のスタンスとは一味違った趣を感じる事が出来るのである。勿論現下の関西経済には楽観的、近視眼的なムードが漂っている側面もあることも見逃していない（インバウンド需要の急速な増加や東京後追い型のスタンスなど）。こうしたバランスのとれた複眼的な情勢判断と評価こそが、今後の関西経済を展望する上で極めて重要であり、そこに本書の今一つの魅力があると思われる。

3) 関西経済をアジア圏に位置づけるという視点

第3の魅力は、関西の立ち位置を、関東や中部との相対的な位置づけから、「アジア圏の有望な経済圏の一つ」という位置づけへとシフトしていくという重要性を示唆している点である。編者がはしがきにおいて的確に述べているように、成長を続けるアジアに注目し、アジアとの共生を梃子としてどのように成長できるのか、またそのために何が必要か、という視点こそが求められているのである。東京追従型の経済構造の模索、東京追従型の経済プロジェクトへの疾走の先には、魅力的かつ強靱な関西経済の姿は見えにくい。アジア圏の中で、関西経済を位置づけるという本書の骨太の指針こそが、関西復権の鍵となるはずである。

おわりに

これまでで紹介してきたように、本書は関西経済の過去、現在、将来を展望する上で極めて魅力的かつ野心的な作品である。本書の貢献においても指摘したように、関西経済をアジア圏に位置づけるという視点こそが、関西経済の復権を構想する上で鍵となる点を再度強調したい（評者が在籍しているアジア経済研究所（APIR）における研究方針もまさにこの点にある）。それゆえ今後この視点に基づく考察、分析のより一層の深化、蓄積が望まれるところである。関西はモノ、人、資本において、アジアとどのように関わっていくべきなのか、その施策は何かという点について、本書で提示されたトピックの更なる考察が可能となるはずである。具体的には、中国を核とするグローバル・バリューチェーン（GVC）における関西製造業の新たな位置づけの設計、財消費のみならず、医療サービスや留学生サービスも視野に入れたよ

り広い領域での関西からのサービス輸出の促進、アジア圏における国際的な医療支援、環境保全政策の核としての関西の位置づけなど、トピックスは様々である。実に魅力的な本書の続編が刊行されることを願っているのは、評者だけではないはずである。